

「点滅論法」の誤謬について

著者	三浦 俊彦, 柴田 正良
雑誌名	科学哲学 = Philosophy of Science / Journal of the Philosophy of Science Society, Japan
巻	44
号	1
ページ	91-93
発行年	2011-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/31419

「点滅論法」の誤謬について

三浦俊彦・柴田正良

本誌39-1と43-1に掲載された水本正晴「ゾンビの可能性」(2006)「点滅論法再訪」(2010)に基本的な誤りが見られるので、簡潔に指摘しておきたい。

水本によれば、哲学的ゾンビが論理的に不可能であることを、次のようにして証明できるという(水本、2010, p.46. 様相表現はすべて論理様相を示す)。

1. ゾンビは可能である(帰謬法の仮定)
2. ゾンビが可能であるならば、クオリアが5秒ごとに点滅することも可能である
3. クオリアが点滅したならば、クオリアの点滅は気付かれることはあり得ない
4. クオリアが点滅したならば、クオリアの点滅は気付かれることが可能である
5. ゆえに、クオリアの点滅は気付かれることはあり得ず、かつ気付かれることが可能である(1, 2, 3, 4より)
6. ゆえに、ゾンビは不可能である(1, 5より)

この論証が、言葉の曖昧さによる単純な誤謬推論であることを以下に示そう。

1. 2. の「ゾンビは可能である」は、文字通りにとると「心身一元論(心脳同一説)は必然的真でない」という意味である。心身一元論が成り立たない可能世界の中には、さまざまな心身並行説が成り立つ世界があり、脳状態とは無関係に意識・クオリアが自走する世界もあるので、4. は真だが3. は偽である。よって帰謬法は成り立たない。

そこで1. 2. は、二元論的世界一般ではなく、クオリアの物理への自然的

SV（スーパービーニエンス）が成り立つ可能世界についてだけ述べているとしよう。すると、自然的SV世界では身体の物理構成と心身法則が同一のままクオリアが点滅するというのは論理的に不可能なので、2. が成り立たず、論証は不発となる。（ちなみに2. を、「自然的SVが成り立っていても、その世界から見てクオリア点滅が起こる可能世界はある」と読むならば、前段落と同じことになり、2. は真だが3. が偽となる）。

こうして、寛容の原則により、点滅論法の可能世界とは、自然的SVは成立しないが、クオリア・意識が自走しているような二元論的世界でもない、次のような世界だと想定できる。クオリアが消滅するときには自然的SVが全面的に一時中断し、クオリアが点るときには自然的SVが全面的に回復しているような世界。換言すれば、クオリア点滅に必要な最小限の法則破れを被ったような自然的SV世界である。

このような可能世界では、世界中のまたは一部の意識生命体の身に、ゾンビと非ゾンビが5秒ごとに交代するという事態が起こりうる。このような可能世界では3. 4 がともに成り立ってしまい、実は不可能世界だった、と証明できるのだろうか。

その種の可能世界では、現象的意識が存在するときには自然的SVが成立するので、現象的記憶は機能的記憶から逸脱できない。物理的世界ではクオリアに対応する物理刺激がずっと存在している以上、機能的記憶においてその刺激が「少し前に全面的に消えた」などということを出し出すことは不可能であり、現象的記憶においても、「少し前にクオリアが全面的に消えた」などということを出し出すことは不可能となる。その世界では、自然的SVが常時成り立つ世界と同様に、「ずっとクオリアはあった」と現象的に思い返される。現象的意識は、その時の脳状態に自然的SVしているはずだからだ。こうして4. 「クオリアの点滅に気づくことは可能」という前提が成り立たない。

以上のような線に沿った点滅論法批判（三浦、2008）への反論を期した水本（2010）は、残念ながら可能世界の場合分けを怠っており、同一の可能世界で矛盾（5.）が生起することを立証していない。別々の可能世界で起こる事柄を一緒くたにして、見かけ上の矛盾を提示しているだけなのである。

水本の混乱は、次のような一節からも見て取れよう。

5秒ごとにすべてのクオリアが点滅する、ということ自体は本質的ではないということは見取れるはずである。例えば視野の半分のみが3秒ごとに点滅するとしても同様に議論は成立するのである。（水本、2010, p.47）

「同様に議論は成立する」という認識は、各可能世界の区別がなされていないことを示している。視野の半分が点滅するような可能世界は、クオリアの点っている間にも自然的SVが成り立たないような、クオリアが相当程度独立に自走する世界なので、3. 「クオリアの点滅は気付かれることはあり得ない」は成り立たず、帰謬法は失敗する。対して、すべてのクオリアの全面的点滅の場合は、先に見たとおり3. ではなく4. が不成立であることによって、帰謬法は失敗するのである。

*本稿は、三浦2011の決定稿に柴田が寄せたコメント（論証構成変更の提案）に従って三浦が要約した草稿を、二人で検討・調整したものである。

参考文献

- 柴田正良 2008 「感情のクオリアと可能世界」長滝祥司・柴田正良・美濃正編『感情とクオリアの謎』昭和堂 pp.3-30.
- 三浦俊彦 2008 「人間原理的クオリア論」『感情とクオリアの謎』 pp.151-172.
- 三浦俊彦 2011 「クオリアの点滅」『論理パラドクシカ』二見書房 pp.109-118.
- 水本正晴 2006 「ゾンビの可能性」『科学哲学』39-1 pp.63-77.
- 水本正晴 2010 「点滅論法再訪」『科学哲学』43-1 pp.45-59.